### **C.R.A.D.L.E.-Aスーツ**

### **◆ 概要**

C.R.A.D.L.E.-Aは、アミア・ブレトネメルのために開発された、**神経共鳴型・超反応制御式強化外骨格**である。  
 本スーツは従来のパワードスーツのように操縦者の動作に“追従”するのではなく、**アミア自身の神経系と完全に融合し、“反射”や“衝動”に即応する**ことを前提に設計されている。

アミアは、生体神経によって機械を直接制御する特異能力を有しており、C.R.A.D.L.E.-Aには従来の操作インターフェースは一切存在しない。  
 彼女の神経活動がそのままスーツの駆動指令へと変換され、意識の介在なく「**動きたいと思った瞬間**」に、スーツが先に動く。  
 これは単なる操作支援ではなく、**彼女の意思と神経、そして筋肉が“外骨格そのもの”へと拡張された状態**である。

スーツはアミアの反応速度と運動指令に対して一切の遅延なく応答し、時には使用者の反応を上回る予測駆動すら可能とする。  
 この結果、戦闘時のアミアは一切の躊躇なく行動でき、**彼女の“条件反射”そのものが敵を叩き潰す機動力と殺傷力へと直結**する。

主武装は神経接続も機能拡張もされていない、ただの特殊金属製ブレード。  
 だがスーツの質量制御と運動加速を得た彼女が振るう一撃は、**受け止めれば武器を弾かれ、受け損なえば骨ごと叩き折られる**。  
 その刃は、切るためではなく、“圧”で制圧するために存在している。

一方で、最大出力時には使用者の脳神経に過負荷がかかり、長時間の稼働は命に関わる危険を孕む。  
 そのためスーツには稼働時間と負荷に応じた強制停止機能が搭載されており、**22分の超反応維持で自動遮断が発動**する設計となっている。

非戦闘時、アミアはスーツを全パージし、基本的に車椅子で生活する。  
 それは彼女にとって“過去の弱さ”の象徴ではなく、**スラムでの過酷な日々を生き抜いた誇りの証**であり、  
 「スーツで歩ける自分」と「車椅子で生きた自分」の両方が、彼女の“アイデンティティ”として共存している。

C.R.A.D.L.E.-Aは、兵器ではない。  
 それは、**“立てなかった少女が、自分の足で世界に意志を示すための神経の外殻”**である。

## **特徴**

C.R.A.D.L.E.-Aは、アミア・ブレトネメルのために設計された**神経共鳴型・非介在式の超反応制御スーツ**である。その最大の特徴は、使用者の動作を補助・拡張する従来のパワードスーツとは異なり、**装着者の神経活動そのものがスーツの運動を直接駆動する**という設計思想にある。

アミアは、生体神経を通じて機械と感覚レベルで接続できる特異な能力を持つ。C.R.A.D.L.E.-Aはこの能力を応用し、**操作装置や入力系を一切排除した神経直結式の駆動系**を採用。スーツはアミアの神経信号、反射、無意識下の衝動すら感知・補完し、意識による判断よりも速く“先に動く”ことを可能にしている。

また、アミアの筋肉構造とスーツの関節構造はリンクしており、**肉体と機械の一体化により、運動指令の遅延が事実上ゼロに近い**。そのため彼女の一撃は、常人の視覚では追えない速度と、質量×加速度に基づく“運動エネルギーの塊”として放たれる。とくに使用されるのが、神経接続も機能追加もされていない**ただの金属ブレード**である点は象徴的で、これを振るうことで、スーツの性能と彼女自身の「意思と反応」の純度を強調している。

さらに、C.R.A.D.L.E.-Aは戦闘用スーツであると同時に、アミアにとって“歩行手段”でもある。スーツ着用時、彼女は初めて自力で立ち、歩き、戦場に立つことができる。しかしこの稼働には大きな負荷が伴い、とくに100%出力状態では脳神経に過剰な刺激が走るため、使用時間に制限が設けられている。過負荷状態が続けば、最終的には自動的に接続が遮断され、彼女の命を守る安全機構が起動する。

日常ではスーツを解除し、車椅子で生活する彼女にとって、スーツは“足”であると同時に“戦場での存在証明”である。戦うための手段である以上に、**自らの意志と、過去を超えるという覚悟を具現化した神経の外殻**。それこそが、C.R.A.D.L.E.-Aの本質である。

## **性能**

C.R.A.D.L.E.-Aは、アミア・ブレトネメルの特異な神経接続能力に完全対応した、**神経共鳴型・高機動超反応スーツ**である。最大の性能的特長は、「操縦」ではなく「同化」に近い制御方式にある。スーツには従来のような物理的操作系が存在せず、アミアの神経活動を直接入力信号として読み取り、**思考や反射と同時に挙動が発生する“ゼロラグ駆動”**を実現している。

この神経直結構造によって、スーツはアミアの**意識・無意識の区別なく運動を補完し、神経反応の速度上限に対応可能な構造**となっている。さらに、筋動作とのリンク構成により、装着者の身体運動と外骨格の動きが完全に一致し、**情報伝達における一切の物理的ラグが排除された高精度な反応制御**が可能となる。

C.R.A.D.L.E.-Aの各関節は、アミアの神経信号に対して**通常の人間が行動を起こす前段階（予兆）**に応じて作動準備を完了させる設計となっており、**動作と動作の間の“判断”を不要とする極限の応答性**を実現。結果、ブレードによる一撃は肉体のリミッターを超えた速度と質量を伴い、対装甲・対武装戦においても圧倒的な破壊力を発揮する。

稼働モードは通常（80%）と最大（100%）の2段階に分かれ、80%モードではアミア自身の戦術判断と反射の両方が生きる状態となる。これでも一般的な戦士を圧倒する機動性・汎用性を備えるが、100%出力に移行すると判断力が一部遮断され、**「本能と反射だけで動く戦闘形態」へと移行。全挙動が条件反射に置き換わり、思考速度を超えた斬撃・加速・回避を可能とする。ただし、このモードは神経負荷が極めて高く、使用は22分を限界とし、超過すれば自動的に強制停止シーケンスが作動する**。

C.R.A.D.L.E.-Aは、ただの装甲ではなく、アミアの神経と融合し、**意思・反射・機動を限界まで最適化した“神経駆動兵装”である。  
 その性能は、使用者の心と身体の深層にまで踏み込み、「誰よりも速く、誰よりも先に動く」ことを目的として作られた、生体と機械の融合体**と言える。

## **非戦闘時におけるアミアのスーツへの感情**

アミアにとって、C.R.A.D.L.E.-Aスーツは単なる兵装ではない。それは彼女が「歩けるようになる」ための唯一の手段であり、**地を這って生きた過去から、自らの意志で立ち上がる“再誕の証”**である。

歩行能力を得るということ──それは、彼女にとって**奇跡であり、夢の一部が叶った瞬間**だった。スーツを初めて装着し、立ち上がったときのあの瞬間を、彼女は忘れていない。それは、誰の手も借りずに“前へ進める”という、彼女がスラムの地獄で願い続けた祈りの形だった。

しかし、だからこそ彼女は理解している。  
 「**特別なものは、いつも使っていると、特別ではなくなってしまう**」ということを。

C.R.A.D.L.E.-Aは、戦う時にだけ着るもの。**必要な時にだけ“夢を使う”**。それがアミアなりの敬意であり、線引きであり、守るべき距離感なのだ。

日常生活では、彼女は自らスーツを脱ぎ、車椅子に戻る。そこには「**過去を否定しない**」「**夢に頼りきらない**」という、彼女なりの強さがある。

「**スーツがあるから、歩ける。  
 でも、歩けない時間があったから、今が特別なんだよ。**」

アミアにとってスーツは、「足」でもあり、「刃」でもあり、そして「希望」でもある。  
 だがそれを日常に持ち込むことは、**特別だった感覚を“当たり前に変えてしまう”ことへの抵抗**でもある。

そして彼女は、それを強く望まない。なぜなら、**“特別”は最後の拠り所として、ずっと心に残しておきたいもの**だからだ。